

## 同性・異性に対して感じる「怖さ」とその性差 ——「怖さ」の質の違いに注目して<sup>1)</sup>

Fear of same and opposite sex people: Its gender difference and variety of forms

向井靖子

東京大学大学院教育学研究科

### 問題と目的

誰も一度や二度は日常生活において他者を怖いと感じたことがあるだろう。しかし、一口に他者を「怖い」と感じると言ってもその主観的な経験の意味は異なると考えられる。例えば相手が「怒りにまかせて感情をぶつけてくる」場合の「怖さ」と、相手に「心の奥底まで見透かされそう」な場合の「怖さ」とは内容的に異なると考えられる。このことに注目した伊藤(1997)は、人を「怖い」と感じる経験には多様性があると考え、「他者を『怖い』と感じる経験」を「他者が何らかの意味で脅威として感じられ、その他者を回避したくなるような経験」と定義して「怖さ」の多様性を検討している。本研究でも「怖さ」の多様性、「怖さ」の質の違いに注目して、他者に対して感じる怖さを検討する。

さて、「怖さ」に多様性が見られる背景の一つとして、怖さには、怖さを感じる側の要因が影響していることが考えられる。怖さを感じる側の要因には様々なものが想定されるが、本研究では性差を取り上げる。芳川(1982)は対人恐怖症者に対しエゴグラムと20答法を実施し、男性、女性それぞれについて、異なる特徴があることを述べている。上記の研究結果を一般群にそのまま当てはめることには慎重を要するが、このような結果からも、怖さを感じる側の性別によって、怖さの質や感じる怖さの度合が異なることが予想される。また怖さを感じる相手が同性であるか異性であるかによっても怖さの質や度合は異なる可能性が考えられる。異性に対する不安は対人不安研究の領域においてデート不安や異性社会不安(Curran, 1977)として注目されているように、同性と異性に対しては感じる怖さの質も度合も異なっていることが予想される。

以上より本研究では、相手に対して感じる「怖さ」について、「怖さ」を感じる主体および「怖さ」を感じさせる相手の性差による違いを、「怖さ」の質の違いごとにそれぞれ検討することを目的とした。

### 方 法

調査時期：1997年10月下旬から11月下旬。

調査対象：東京都内の大学生・大学院生188名(平均年齢21.4歳)。うち男性81名(平均年齢21.5歳)、女性107名(平均年齢21.3歳)。質問紙の構成：「怖さ」に関する項目。伊藤(1994, 1997)の対人恐怖的他者認知尺度を一部修正、加筆して25項目に再構成したものを用いた。項目の選択および修正、加筆は、先行研究において因子負荷が、4以上の項目を取り上げ、その上で内容的にほぼ同一な複数の項目を

1) 本論文は東京大学教育学部に提出した卒業論文(1997年度)の一部に修正、加筆したものである。

一つの項目としてまとめた。なお項目24(「裏切られそうで怖い」)は、伊藤の尺度項目には存在しないが、「怖さ」の一つを代表する項目であると考え、調査者が独自に加えた。

各項目の「怖さ」を感じる程度について、それぞれ男性一般、女性一般の双方について、どの程度あてはまるのかを、「非常によくあてはまる」から「全くあてはまらない」までの5段階で評定させた。なお質問紙は調査者が個別に配布、実施した。

### 結 果

本研究では以下に挙げる $2 \times 2 = 4$ 条件の比較を行った。条件1：回答者が男性で「怖さ」を感じる相手が男性の場合。条件2：回答者が男性で「怖さ」を感じる相手が女性の場合。条件3：回答者が女性で「怖さ」を感じる相手が男性の場合。条件4：回答者が女性で「怖さ」を感じる相手が女性の場合。各条件ごとに因子分析(主因子解, Varimax回転)を行い、累積寄与率が50%を越えたところで因子の抽出を終えたところ、4条件ともほぼ同様の3因子が抽出された。そこで因子負荷が、4以上の項目、かつ4条件に共通な項目を選出した結果をTable 1に示した。第1因子(「危険認知・強圧感覚」)の項目群に示される「怖さ」は、相手の言動が直接「怖さ」を喚起する、すなわち「感情をむき出しにする」「行動を悪いほうにとろうとする」というように、「怖い」のは相手の言動そのものであり、相手の言動が直接喚起する「怖さ」である。第2因子(「認知困難・拒絶感覚」)の項目群に示される「怖さ」は、相手の考え・行動が読めないため「怖さ」を感じる、すなわち「何を考えているのか分からない」といった、相手の考えや行動が読めないことから生じる「怖さ」であり、またそのために「受け入れられず拒絶されそう」「裏切られそう」といった、相手に拒絶されそうな感覚が呼び起こされる「怖さ」である。第3因子(「優越認知・劣等感覚」)の項目群に示される「怖さ」は、「怖さ」を感じる自分自身に引け目がある、すなわち「(自分より)優れている」「相手に評価されているよう」といった、相手より劣った者として評価されることへの「怖さ」であり、またそのような自分自身への引け目が相手に見抜かれているのではないかと、すなわち「気持ちが見透かされそう」といった「怖さ」を抱いているのではないかと考えられる。

次に「怖さ」の下位尺度得点を算出した。各因子を構成する項目の粗得点(1~5点)を合計したものを各下位尺度得点とした。Cronbachの $\alpha$ 係数は $\alpha = .81 \sim .86$ であり、各下位尺度の内的一貫性は確認されたといえる。尺度間相関は $r = .49 \sim .66$ と全体的に高めの相関が見られたが、伊藤(1997)と同様、各「怖さ」尺度の共通性よりも独自性の方を優先して後の分析を行った。この下位尺度得点を用い、各下位尺度ごとに、2(被験者間：回答者の性別) $\times$ 2(被験者

Table 1 「怖さ」因子と項目群

	factor1	factor2	factor3	共通性
<b>第1因子：「危険認知・強圧感覚」因子</b>				
相手の言動が直接「怖さ」を喚起する(6項目)				
8. 思ったことをすぐ口にするから怖い	.76			.64
18. 感情をむき出しにするから怖い	.71			.61
3. 相手の怒りがそのままぶつけられるから怖い	.70			.56
6. 心の中に土足で入られるから怖い	.69			.60
1. あなたの行動を悪いほうにとらえるから怖い	.60	.42		.54
11. 相手の考え方や価値観を押し付けられるから怖い	.52		.40	.49
<b>第2因子：「認知困難・拒絶感覚」因子</b>				
相手の考え・行動が読めないため「怖さ」を感じる(6項目)				
24. 裏切られそうなので怖い	.72			.59
12. 何を考えているのか分からないから怖い	.70			.54
2. 裏で何をしているのか分からないから怖い	.68			.52
9. あなたが受け入れられず拒絶されそうだから怖い	.67			.63
16. 精神的に傷つけられそうで怖い	.67			.63
14. よそよそしく冷たい感じがするから怖い	.64			.54
<b>第3因子：「優越認知・劣等感覚」因子</b>				
「怖さ」を感じる自分自身に引け目がある(5項目)				
15. あなたよりも相手のほうが正しいことを言うから怖い			.83	.72
10. あなたより優れているから怖い			.73	.59
21. あなたの考えを否定するので怖い	.44		.67	.66
20. あなたの気持ちが見透かされそうなので怖い			.66	.64
25. あなたが相手に評価されているようで怖い		.45	.56	.52
因子寄与	3.55	3.33	3.04	

主因子解, Varimax 回転 因子負荷が .4 以上を掲載。  
ここに掲載した値は4群をだみにした場合の因子分析結果だが、因子構造は4群ともほぼ同様であった。

内：「怖さ」を感じる相手の性別)の繰り返しのある分散分析を行った。「危険認知・強圧感覚」では「怖い」対象の性別による主効果にのみ5%水準での有意差が見られ ( $F(1,182) = 6.53, p < .05$ )、回答者の性別による主効果、「怖い」相手の性別と回答者の性別との間の交互作用効果には有意差は見られなかった ( $F(1,182) = 0.43, n.s.$ ;  $F(1,182) = 3.46, n.s.$ )。「認知困難・拒絶感覚」では「怖い」相手の性別による主効果で1%水準、「怖い」相手の性別と回答者の性別との間の交互作用効果で0.1%水準での有意差が見られた ( $F(1,186) = 10.56, p < .01$ ;  $F(1,186) = 13.53, p < .001$ )。回答者の性別による主効果には有意差が見られなかった ( $F(1,186) = 1.81, n.s.$ )。これらに対し「優越認知・劣等感覚」では「怖い」相手の性別による主効果、回答者の性別による主効果、「怖い」相手の性別と回答者の性別との間の交互作用効果のすべてにおいて有意差が見られなかった ( $F(1,186) = 0.79, n.s.$ ;  $F(1,186) = 0.02, n.s.$ ;  $F(1,186) = 1.48, n.s.$ )。なお条件ごとに「怖さ」下位尺度得点の平均値をそれぞれの項目数で割ったものがTable 2、条件ごとに図示したものがFigure 1である。いずれの条件においても「認知困難・拒絶感覚」が最も高い得点を示しているが、条件1(回答者が男性で、「怖さ」を感じる相手が男性の場合)のみ、他の条件群に比べ、全体的に低い「怖さ」得点を示した。

考 察

まず同性・異性に対して感じる「怖さ」の性差という観点から今回の結果を検討する。条件1から条件4までの比較の結果、男性は同性に対して「怖さ」を感じる程度が低いという結果が得られた。これを女性の側から捉えれば、女性は同性に対しても異性に対しても、同程度に「怖さ」を感じて

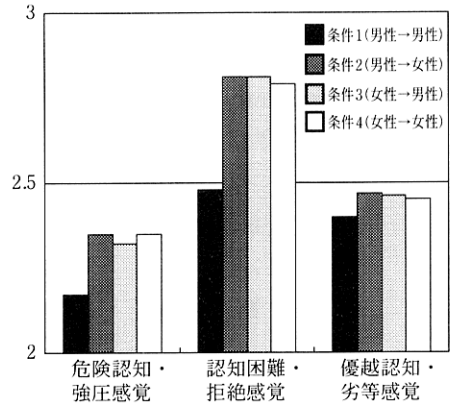


Figure 1 および Table 2

	危険認知・強圧感覚	認知困難・拒絶感覚	優越認知・劣等感覚
条件1	2.17(0.74)	2.48(0.82)	2.40(0.85)
条件2	2.35(0.82)	2.81(0.88)	2.47(0.94)
条件3	2.32(0.78)	2.81(0.84)	2.46(0.88)
条件4	2.35(0.79)	2.79(0.84)	2.45(0.91)

条件別に示した「怖さ」尺度得点の平均値( )内は標準偏差。

いるという結果が得られたと言える。

次に分散分析の結果から性別による違いを因子ごとに考察する。「危険認知・強圧感覚」因子では、相手が女性の場合に有意に高い得点を示した。このことは、女性は感情をむき出しにするといった印象を男女ともに持っている可能性を窺わせる。

「認知困難・拒絶感覚」因子では、回答者が男性で相手が男性の場合のみ、有意に低い得点を示した。すなわち男性の場合、同性に対して「相手が理解できない、拒絶されそう」といった「怖さ」を異性に対するほど感じていないが、女性の場合はそうではないことが示された。このことは同性との対人関係形成、コミュニケーションのあり方が男女によって異なることも関連しているのではないだろうか。

一方「優越認知・劣等感覚」因子では条件間の差が見られなかった。このことから、自らの劣等感が「怖さ」をもたらす場合には、相手の性別要因は必ずしも「怖さ」に関連しないことが示唆される。

引用文献

Curran, J.P. 1977 Skills training as an approach to the treatment of heterosexual social anxiety: A review. *Psychological Bulletin*, 84, 140-157.  
 伊藤直樹 1994 中学生・高校生における人を「怖い」と感じる経験の諸様式 東京大学教育学部紀要, 34, 217-227.  
 伊藤直樹 1997 対人恐怖的他人認知尺度作成の試み 心理臨床学研究, 15, 309-316.  
 芳川玲子 1982 対人恐怖症者の自己概念に関する研究 東京大学教育学部教育相談室紀要, 5, 129-141.